

複数の語形を表す《略字》について

—明治期の速記入門書の場合—

アルベケル・アンドラーシ・Zs.

東海学院大学 非常勤講師

キーワード：明治期、速記、略字、同一符号、近代語、文体

1 はじめに

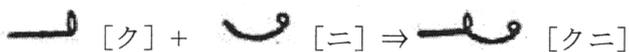
速記とは、言葉を発言のまま即座に書き取る表記法の事である。具体的には話された文章をそのまま文字化したり、一定の方式で簡略化したり、常用される表現を符号化したりして、口述された文章を出来る限りそのまま写してゆく方法である。

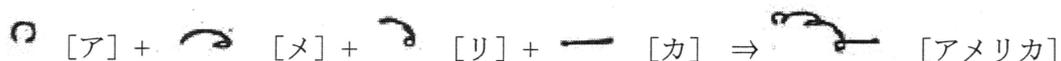
日本では既に幕末から速記に関する紹介・解説があった。明治時代に入ってから西洋の速記法を翻案する試みも行われ、1882年になると源（田鎖）綱紀が日本傍聴筆記法講習会を開講した。翌年に黒岩大・日置益が最初の速記入門書を刊行した。以降、大勢の関係者により速記の改良や教育とともに実用化が進められ、言文一致に大きな影響を与えた。初期の速記資料の代表的な例を挙げると『経国美談 後編』（1884）、『怪談牡丹燈籠』

（1884）、『速記叢書講談演説集』（1886～1887）等があり、更に1890年から帝国議会にも速記が採用された。このように速記資料には演説・落語・議会録などがあり、近代語の資料として語彙・文体・文法等の方面から国語学的研究が行なわれてきた。

2 速記符号とその問題点

速記符号は二種類に分類することが出来る。「基礎符号（基礎文字・基本文字）」とは、表音的な符号の事で、速記法の基礎となる。

例  [ク] + [ニ] ⇒ [クニ]

 [ア] + [メ] + [リ] + [カ] ⇒ [アメリカ]

（源・丸山 1885）

「略字（略語）」とは、頻繁に使われる単語・語句などを簡単な符号で表記する表語的な書き方である。

例 ㄥ [日本]、J [シテ]、ㄥ [如斯場合ニ於テ] (源・丸山 1885)

略字を作る際、単語を再現するためにさほど重要でない部分(音節や母音)を省略することが中心となる。¹⁾ 例えば、[思フ] ⇒ [オウ] ㄥ (清沢 1884)、[頗ル] ⇒ [スル]

ㄥ (若林 1886)、[善キ] ⇒ [ヨ] ㄥ (森本・岸上 1885)、[日本] ⇒ [NP] ㄥ (源・丸山 1885) 等。このような略字の中に、英語速記から借用されたと思われるものもある。²⁾ 例えば、[it] を [T] ㄥ で表した略字に [夫] という訓が与えられ、[use] の略字である [Z] ㄥ に [用] が宛てられた(丸山 1885)。なお、上記のような略字の他に乎古止点に類似している「加点法」の使用や漢字・仮名を速記に取り入れる工夫も見られる。³⁾

略字の場合、問題になるのは、複数の語形を表す符号もあるということである。⁴⁾

[コレ/コノ] ㄥ (森本・岸上 1885) のように前後の文脈から判断して正しく読み取れる場合もあるが、[賭易キ/賭易イ] ㄥ (若林 1886) のように文語体・口語体の活用形を同時に表す略字もある。

この問題を扱った先行研究に清水(1998・2004)がある。清水は、『怪談牡丹燈籠』の速記者である若林珮蔵の『速記法要訣』(1886)を調査し、複数の語形を表す略字(清水はこれを「同一符号」と呼んでいる⁵⁾)をその特徴により十二のグループに分類した。そのうち五つのグループに属している同一符号の意味・機能差は文体判定に影響を与え得ることを指摘し、

「これらの語形が、速記符号として同一であり、反訳の際に、いずれにも〈転び得る〉ものとして用意されているのであれば、速記符号は、遂に、〈口語史〉を求めるものとしての〈国語史〉資料としては、不満と失望とを与える装置となってくるだろう」(1998: 49)

と述べている。

本稿の目的は、このような同一符号が『速記法要訣』以外の速記入門書にどの程度収録されているかを明らかにすることである。

3 調査資料

まず、明治期の速記入門書を把握するために『日本速記百年記念誌』掲載の「速記関係文献目録 第一部図書」(1983: 169-210)を参照した。これには、再版も含め、124点の明治期の入門書が収録されている。この目録をもとに国立国会図書館デジタルコレクションから速記入門書を71点ダウンロードできた。この71点の入門書を調査し、問題になりそうな同一符号を採取した。ただし、欠頁のある入門書もあるため、同一符号の全貌が把握

できない場合もある。

4 若林珣蔵の同一符号とその改良⁶⁾

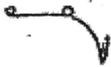
以下で清水の分類に従って『速記法要訣』の同一符号を示し、若林系の入門書である『速記法講話筆記』（豊島鉄太郎、1892）と若林の改良案である『速記術』の同一符号と比較する。

一部改変・廃止された符号があるものの、『速記法講話筆記』は『速記法要訣』の同一符号を受け継いでいる。さらに、『速記法要訣』では見られない[至リ/ルッテ] の同一符号も作っている。それに対し、『速記術』は、動詞の連用形とテ形、形容詞の文語の連体形と口語の連体・終止形を別々の符号で表す傾向がある。また、「極メル/ムル」「ヨシヤ/ヨシンバ」などのような同一符号は見られない。偶然収録されていないだけなのか、区別をすべきと考えを改めたのか、現段階では不明である。なお[アレバ/アラバ]は『速記術』で[アレバ]に改変されたが、若林系の『軍事応用速記術』（大出政寿、1894）ではそのまま採用されている。

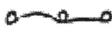
a 動詞連用形/連用形～テ

速記法要訣 1886	速記法講話筆記 1892	速記術 1893 (第二版 1902)
当リ/ッテ	アタリ/ッテ	当ル/リ , 当ッテ
破ル/リ/ッテ 	破リ/ル/ッテ 	破ル/リ , 破ッテ
譲ル/リ/ッテ 	譲リ/ル/ッテ 	譲ル/リ , 譲ッテ
劣ル/リ/ッテ 	劣リ/ッテ/ル 	×
残ル/リ/ッテ 	残り/ル/ッテ 	残ル/リ , 残ッテ
×	至リ/ル/ッテ	×

b 一段活用型/二段活用型の連体形

速記法要訣 1886	速記法講話筆記 1892	速記術 1893 (第二版 1902)
極メル/ムル 	極メル/ムル 	×

c 形容詞終止連体形～イ/連体形～キ

速記法要訣 1886	速記法講話筆記 1892	速記術 1893 (第二版 1902)
近イ/ク/キ 	近イ/ク/キ 	近ク/キ  、近イ 
深ク/キ/イ 	深キ/ク/イ 	深ク/キ  、深イ 
睹易キ/イ 	×	×
珍ラシキ/イ 	珍ラシキ 	珍ラシク/キ  珍ラシイ 
面白イ/ク/キ 	面白イ/ク/キ 	面白イ 

d 仮定形（文語已然形）～バ/文語未然形～バ

速記法要訣 1886	速記法講話筆記 1892	速記術 1893 (第二版 1902)
アレバ/ラバ 	アレバ/ラバ 	アレバ 

e 同一語の別の読み又は別語（意味・機能差が小さい）

速記法要訣 1886	速記法講話筆記 1892	速記術 1893 (第二版 1902)
イッサイ/イッセツ ㇿ	イッサイ/イッセツ ㇿ	×
ヨシンバ/ヨシヤ ㇿ	ヨシヤ/ヨシンバ ✓	×
余リ/アンマリ ㇿ	余リ/アンマリ ㇿ	余リ ㇿ
而シテ/従ッテ ㇿ	而シテ/従テ ㇿ	而シテ ㇿ 従ッテ ㇿ

5 若林系以外の入門書の同一符号

若林系以外の入門書から採取した文体判定に関わる同一符号は以下のように八つのグループに分類出来る。

a 動詞連用形/連用形〜テ

- ・林甕臣^{みかおみ}1889 a : [ツキ/ツイテ (就・付)] ㇿ、[ヨリ/ヨッテ (依・因・由)] ㇿ
- ・林甕臣 1889 b : [ツキ/ツイテ] ㇿ、[ヨリ/ヨッテ/ニ因テ] ㇿ

b 一段活用と二段活用の連体形

- ・林甕臣 1889 b : [シカネル/シカヌル] ✕、[ナシカネル/ナシカヌル] ㇿ
- ・矢野由次郎 1902 : [ラルル/ラレル] ㇿ
- ・源綱紀 1904 : [ラルル/ラレル] ㇿ、[ルル/レル] ㇿ
- ・丹羽滝男 1907 : [ルル/レル] ㇿ

c 形容詞終止連体形～イ/連体形～キ・終止形～シ

- ・林麿臣 1889 b : [シガタイ/シガタシ] ✕、[シニクイ/シニクシ] ✕、[ナシガタイ/ナシガタシ] ✕、[ナシニクイ/ナシニクキ] ✕

d 仮定形（文語已然形）～バ/文語未然形～バ

- ・多田宗宜 1885 : [アレバ/アラバ] ㄣ

e 同一語の別の読み又は別語（意味・機能差が小さい）

- ・森本大八郎・岸上操 1885 : [恰モ/チャウド] ㄣ、[ヨリ/カラ] ㄣ、[然レドモ/ケレドモ] ㄣ、[何故ニ/ナゼ] ㄣ
- ・小島周二 1885 : [丁度/恰モ] ㄣ、[カラ/ヨリ] ㄣ
- ・林麿臣 1889 a : [デモヤハリ/デモヤツパリ] ㄣ（林 1889 b で符号が改められ、[デモヤハリ] ㄣのみを表している）
- ・林麿臣 1889 b : [ケレドモ/ケドモ] ㄣ、[シタガ/セシガ] ㄣ、[シタケレドモ/シタレドモ/セシカドモ] ㄣ、[スルケレドモ/スレドモ] ㄣ、[ヨリ/カラ] ㄣ（林 1889 a で [ヨリ] と [カラ] は別々の符号で表記されている）
- ・林麿臣 1898 : [ヨリ/カラ] ㄣ

f 代名詞

- ・高橋鶴太郎 1885 : [我レ/私/僕/ワタシ] 一、[我等/我々/私共] 一、[彼/汝/君/誰/アナタ/己レ/コナタ/ソナタ] 一、[彼等/アレラ/汝等/己等/君ガタ/アナタガタ/御前ガタ] 一、
- ・多田宗宜 1885 : [己/ヲマイ] ㄣ、[ヲマイタチ/ヲマイ方] ㄣ、[君/貴公/貴様] 一、[貴君等/貴殿等/貴様等] 一、[我/私/ワタシ/我輩] 一、[私共/我々/我輩共] 一

- ・林甕臣 1889 a : [吾/オイラ/オレ] ①、[汝/オマへ] ②、[彼/アレ] ③、[僕/ワタシ] ④、[君/アナタ] ⑤、[吾輩/ワレラ] ⑥、[汝等/オマヘラ/オマヘガタ] ⑦、[彼等/カレラ/アイラ] ⑧、[僕等/ワタシラ/ワタクシドモ] ⑨、[君等/キミガタ/キミタチ] ⑩、[イツレ/ドレ/ドノ/ナニ] ⑪、[何所/イツコ/イツク] ⑫、[此方/コナタ/コッチ] ⑬、[其方/ソナタ/ソッチ] ⑭、[彼方/カナタ/アッチ] ⑮、[カナタコナタ/アッチコッチ] ⑯
- ・林甕臣 1889 b : [吾/オイラ] ①、[汝/オマへ] ②、[彼/アレ] ③、[僕/ワタシ] ④、[君/アナタ] ⑤、[何所/イツク] ⑥、[何/幾/如何/イカニ/イカガ/ドウチャ/ドレ] ⑦
- ・丹羽滝男 1889 : [我/私] ①、[吾輩/我等] ②、[ドレ/イツレ] ③
- ・熊崎健一郎 1907 : [私/吾] ④

g 動詞の活用表と助動詞

今回調査した資料の中で問題になるのは林式（林甕臣 1889 ab）と熊崎式（熊崎 1906、1907・伊藤 1908）の速記入門書である。以下の用例は林甕臣 1889 b と熊崎 1906 より採取した。

イ 打消しの助動詞

・林式 : [ナイ/ヌ/ネ/ズ/ザル] 例 [シナイ/セヌ/セズ/セザル] ✕

・熊崎式 : [マセヌ/ズ/ザル] 例 [シマセヌ/セズ/セザル] ②

ロ 推量・意志の助動詞

・林式 : [ヨウ/ウン] 例 [シヨウ/セン] ✓、[ダロウ/デアロウ/ラン] ✓、[デアロウ/ケン] ✓

・熊崎式：[マセウ/ン] 例 [シマセウ/セン]

ハ 打消しの推量・意志の助動詞

・林式：[マイ/ザラン] 例 [シマイ/セザラン]

・熊崎式：[マスマイ/ザラン] 例 [シマスマイ/セザラン]

ニ 過去・完了の助動詞

・林式：[タ/キ/シ/シカ] 例 [シタ/セシ]

h 断定の助動詞

文末表現を表す同一符号は林式のみで見られる。用例は林甕臣 1889 b による。

[チャ/ダ] 例 [ノチャ/ノダ]

また、名詞/形容動詞/副詞/文+文末表現を表す同一符号を整理すると、以下のように分類出来る。

① [デアル/チャ/ダ] 59 語、例 [本統デアル/チャ/ダ]

② [デアリマス/デス] 39 語、例 [仕合デアリマス/デス]

③ [デアル/チャ] 8 語、例 [偽デアル/チャ]

④ [デアリマス/別語デス] 2 語、例 [左様デアリマス/ソウデス]

⑤ [デアル/チャ/ダ/別語ダ] 1 語、例 [左様デアル/チャ/ダ/ソウダ]

⑥ [デアル/チャ/別語ダ] 1 語、例 [斯様デアル/チャ/コウダ]

⑦ [デゴザル/チャ/ダ] 1 語、例 [道理デゴザル/チャ/ダ]

⑧ [デアル/チャ/ダ/別語デアル] 1 語、例 [当タリマヘデアル/チャ/ダ/トウゼンデアル]

⑨ [デアリマス/デス/別語デス] 1語、例 [当リマヘデアリマス/デス/トウゼンデス]

⑩ [デアアル/デス] 1語、例 [仕合デアアル/デス]

6 反訳の際に生じる問題

速記符号を普通文字に反訳する際、間違いが訂正され、読み手にとって読み易くするために添削作業が行われる。また、速記者・編集者の規範意識により単語・語形の書き換えも行われると考えられる。その結果、速記字原稿と反訳文の間に異同が生じる。⁷⁾ 略字の場合は、速記入門書で文語体の語形が、反訳文では口語体になっている例も見受けられる。以下で速記入門書に掲載された速記字原稿と反訳文の相違点を一、二紹介する。

① 源綱紀の演説である「日本傍聴筆記法の効用を述ぶ」の速記字原稿（丸山 1885:

73) では基礎符号 [オソロ] と略語 [シキ] で [オソロシキ] と表記されており、『東洋学芸雑誌』（1885 (42) : 49) でも [怖ろしき] となっているが、同じ表記法で書かれた [イソガシキ] (丸山 1885: 76) は雑誌掲載文では (1885: 50) [忙しひ] となっている。誤植でなければ、形容詞の語尾を表す略字 () は [しき] [しい] の二つの語尾に対応しており、文体判定に影響を及ぼすと考えられる。

② 吉木竹次郎が演説した「国会の議事筆記に関する意見」の速記实例（丹羽 1889: 83) では略語「分」と加點法の「テ」の組み合わせ⁷⁾ が速記字の下の反訳では「分かつて」となっているが、雑誌『速記彙報』（1890 (14) : 8) では「分ちて」と表記されている。又、同資料 (91 頁) では「思」「テ」の組み合わせ は速記实例で「思ふて」と反訳されているが、掲載文 (10 頁) では「思ッて」となっている。このようにウ音便・促音便、文語形・口語形の揺れが見受けられる。

7 おわりに

今回の調査で ① 若林が同一符号の改変を試みたこと ② 若林系以外の入門書にも文体に関わる同一符号が見られることが確認出来た。② に関しては異なる流派の速記者にも使用された可能性がある。⁸⁾

又、林甕臣の「林式」の使用人口も問題となる。林はそれまでの英語速記の翻案と異なり、日本語の音声を基に新字と速記符号を考案し、1887～1898 の間に 7 点の解説書を梓行した。解説書執筆の他「言文一致速記学会」も創設し、自分の速記方式の普及に努めた。林式の使用に関する記事を「日本速記年表 1866-1982」は『速記彙報』(1892 年、第 42 冊)に基づいて以下のように紹介している。

「松本地方裁判所で開かれた代議士中村弥六の官吏侮辱事件公判で、その証拠になる政談演説速記録(巡査が林甕臣式で速記したものという)の鑑定人として市東謙吉が出廷を命ぜられた。方式が違うから読めないということで、結局は証拠不十分により無罪となった。」(宮田 1983: 16)

この記事から林式が演説速記に実用されたことが窺える。しかし、林式で速記された演説などがどれほどあるか、現段階では不明である。

今後の課題は、未見の速記入門書を調査することと、林式で書かれた速記資料の発掘である。

《注》

1. 略字の作り方と種類に関して兼子 1990: 115-131 と 1999: 154-161 を参照されたい。
2. Albeker 2016: 25-29
3. 武部 1942: 267-296 を参照されたい。
4. このような略字は外国語の速記法にも使用されることがある。例えば、Graham の英語速記入門書では [wish] と [she] は [SH] に、[Mr.] [mere] [remark] の三語はいずれも [M] に省略されている (Graham 1858: 134)。或は、ハンガリー語の速記では [irány (方向)] と [miniszter (大臣)] は略字 [IR] で表記されている (Bersényi 2015: 20)。
5. 明治期の速記者である熊崎が「同形異音ノ文字」と名付けている。(熊崎 1906: 93)
6. 引用などの表記に於いては漢字の旧字体・変体仮名と合字を現代の通用字体に改めた。
7. 整文技術に関して兼子 1999: 238-222 (付録 2) を、速記符号と反訳文の相違点に関して Albeker 2015: 28-39 を参照されたい。
8. 「[中略] 速記学習者の間には、有効な略字を他式からも遠慮なく取り入れるという傾向が見られた。それらの中には、解説書になくとも先輩から受け継がれたものがあり、特定の要素が少なくなかった。そのため、有効な略字も相互の間に法則性を欠き、初学者にとって余り覚えやすくないという欠陥を持つに至った。」(宮田 1983: 233)

9. 「[中略] 其の母音たる「あいうえお」の五音の記標は、取りも直さず、其の音を発する口の開合の貌_ヲを象どりて、字体とは、なせるなり。[中略] 又其の父音たる「くすつぬふむゆるう」の九音の記標は、取りも直さず、其の音を発するに、息気運営と相須つ舌唇の作用を表し象どりて、字体とは、なせるなり。」(林 1887:5 オ-5 ウ)

参考文献

- Albeker András Zsigmond (2015) 「明治期演説速記の成立過程—速記字原稿を中心に—」 『國語國文』 第 969 号 28-39
- (2016) 「明治期国語速記に借用された英語略字について」 『日本の速記』 第 929 号 25-29
- 兼子次生 (1990) 『速記研究』 速記文化研究所
- (1999) 『速記と情報社会—古代ローマから 21 世紀へ—』 中公新書
- 清水康行 (1998) 「速記は「言語を直写」し得たか—若林珮蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性—」 『文学』 第 9 卷第 1 号 44-52
- (2004) 「速記と言文一致」 『国語論究 第 11 集』 259-282 明治書院
- 武部良明 (1942) 『日本速記方式発達史』 日本書房
- 宮田雅夫編 (1983) 『日本速記百年記念誌』 日本速記百年記念会
- Bersényi Ivánné (2015) „Gyorsírás 5.lecke” *Szóvilág, március-április*. 2015: 20
- Graham, Andrew J. (1858) *The Hand-Book of Standard or American Phonography in Five Parts*. New York: Andrew J. Graham

資料

- 伊藤浪吉 (1908) 『新式簡明速記学教授書』 帝国速記学会
- 大出正寿 (1894) 『軍事応用速記術』 有則軒
- 清沢与十 (1884) 『傍聴筆記新法独学』 弘文社
- 熊崎健一郎 (1906) 『新式簡明 速記学教授書』 帝国速記学会
- (1907) 『最新速記術』 博文館
- 小島周二 (1885) 『日本傍聴筆記法独学全書』 堀治作
- 高橋鶴太郎 (1885) 『演談傍聴筆記符号独学』 明教社

- 多田宗宜 (1885) 『傍聴筆記学』 東京学館
- 豊島鉄太郎 (1892) 『速記法講話筆記』 豊島鉄太郎
- 丹羽滝男 (1889) 『独学自在日本速記法』 双々館
(1907) 『速成実験応用速記法』 同文館
- 林甕臣 (1887) 『一新発明速記大日本字』 速記大日本字会仮事務所
(1889 a) 『日本新字速記法 一名日本語法文字』 言文一致速記学会
(1889 b) 『日本新字速記学秘訣 一名日本語法文字』 国文館
(1898) 『日本実用国字 一名学生講義筆記学 (訂正増補再版)』 歌文国字会
- 丸山平次郎 (1885) 『ことば乃写真法 一名筆記学階梯』 玉林堂
- 源綱紀・丸山平次郎 (1885) 『日本傍聴筆記法』 沢屋蘇吉
- 源綱紀 (1885) 「日本傍聴筆記法のはなし」『東洋学芸雑誌』 第 42 号 48-52 (大空社による DVD-ROM 版)
(1904) 『増補訂正新式速記術』 青木嵩山堂
- 森本大八郎・岸上操 (1885) 『筆記学協会 傍聴筆記法』 博文本社
- 矢野由次郎 (1902) 『実験速記術』 共成社
- 吉木竹次郎 (1890) 「国会の議事筆記に関する意見」『速記彙報』 第 14 冊 7-11
- 若林珮蔵 (1886) 『速記法要訣』 速記法研究会
(1893) 『速記術』 速記法研究会
(1902) 『速記術 (第二版)』 博文館